

つなぐこと、続けること～「水の学校」の立ち上げから5カ年を経て

NPO法人雨水市民の会 笹川みちる

「水の学校」のはじまり

2013年の夏、当時武蔵野市環境部下水道課におられた平塚香さんからお電話をいただき、初めて武蔵野市役所を訪ねました。当時私は、東京都墨田区に拠点を置くNPO法人雨水市民の会のメンバーとして、墨田区が設置する「すみだ環境ふれあい館」で、雨水活用をはじめとした区の環境施策の展示紹介や親子向けの参加型環境啓発プログラムの企画運営などに携わっていました。それらの活動を知った平塚さんが「武蔵野市で水に関する新しい市民向けプログラムを考えているのでヒアリングをしたい」と連絡をくださったのです。

「下水道課が主管の事業だが、水や水循環そのものに興味を持ってもらい、その面白さやそこから広がる歴史、地形、まちづくりへの学びを共有したい。その結果として、下水道の仕組みや市の事業への理解を深めてもらいたい」という平塚さんの意図には大いに共感するものがありました。生活と水の接点は非常に多様で、上水道・下水道などのインフラを含めた都市の水循環の話や、固定的な施設がなくてもまちなかで水を感じ、学べることが多くあるといったアイデアで盛り上がったのを覚えています。

2014年度から「水の学校」の企画運営を受託し、立ち上げからの2年間、平塚さんとは「水の学校」のことはもちろん、水に関する周辺の話も含めて本当にたくさんお話しし、そのことが講座の幅の広さや運営の柔軟性にも反映されたと感じています。

継続のためのビジョン

2014年度の初め、事業の骨格を固めて、告知、募集、講座開始へと走り始めようというところで、まず驚いたのが、2014年度から5カ年のビジョンを提示されたことです。もちろん武蔵野市も予算編成や業務委託契約は年度ごとに行われますので、想定通りに進められるとは限らないのが大前提です。それでも、段階を経て職員が講座運営のノウハウを身につけ、受講した市民が運営に加わり…という計画を初めにうかがったことで、我々に期待されている役割を理解し、下水道課のみなさんとより近い視点で、パートナーとして事業を担っていくのだという意識が高まりました。

事業が人事異動で打ち切りになったり、当初と趣旨が変わってしまうという事例を聞くことがありますが、担当者が交代することを想定して内外でビジョンを共有し、人のネットワークを作るという事例はなかなか耳にすることがありません。十分に全うできたかはわかりませんが、我々のようなNPOが、市民と行政との橋渡し役として加わることも「水の学校」のスピリットを含めた継続性を担保するひとつの方策だったのではないかと思います。

また、事業開始2年目という早い段階で「循環のみち下水道賞(国土交通大臣賞)」という対外的評価をいただいたことも「水の学校」を大いに後押ししました。これにより、市の内部からの注目も高まり、他分野の市民向け講座においても「水の学校」の企画運営方式が参考にされていると聞いています。このような組織内の風通しのよさも新しい試みを育む土壌となっているのではないのでしょうか。

市民の力

行政と我々NPOに加え、「水の学校」の欠かせない一角を成すのが参加する市民のみなさんです。私自身、連続講座の1期、2期は、ほぼ毎回皆さんの前に立って講座運営を担い、その熱心な勉強ぶりにパワーをもらおうと同時に、運営の不備を指摘されたり、ねらいを鋭く問い正されたり、緊張の連続でした。お互い初めてのことばかりで、試行錯誤も多かったのですが、真剣に向き合い時間を共にしたせいも、その後も「水の学校サポーター」として力を貸してくださっている方が大勢います。

「最初は、『毎回仕切ってくるあの生意気な女はだれなんだ?』って思ってたんだよ」「(サポーターとして来てみて)昨年度より進歩が感じられますね」と遠慮のないことを言いつつも(笑)、頻繁にミーティングや講座運営のサポートに出てきたり、有志の水めぐりを企画して声をかけてくださるみなさんが、「水の学校」の何よりの財産だと感じています。3期以降は市職員のみなさんが受講生との直接のやり取りの中でよい関係を築いてくださっていると思います。

「「水の学校」がきっかけで東京の名湧水57選をめぐり始めて、人生変わっちゃったよ」なんて最高に嬉しい言葉です。人によって強弱はあれども、受講生に、水との接し方が少し変わるような機会を提供できていれば、知識を家族や友人に伝えたり、将来にわたって水に関わる施策に関心を持ち続ける心強い存在が増えていくことでしょう。

6年目、そしてその先へ

改めて「水の学校」の5カ年を振り返ると、5期の連続講座で161名の修了生を送り出し、そのうちの76名がサポーターとなりました。20名以上の市の職員が水を切り口に市民の前で話をしたり、直接意見を聞く機会を持ちました。名誉校長を引き受けていただいた水ジャーナリストの橋本淳司さんをはじめ、講師、見学先などの方々には、解説やアドバイスをいただくと同時に、武蔵野市特有の水環境やその課題、市民の意識について知っていただく機会になったのではないかと思います。そして私自身も、雨水活用に関する普及啓発というところから踏み出し、広く水循環をどう伝えるか、また国や自治体の施策と水循環がどのように関係している、市民はそこにどんなアクションができるのかという視点を持つようになりました。

初めにうかがった「水の学校」の5年後の姿を思い起こすと、まだ道半ばの部分もありますが、たくさんの芽を感じることができます。まずは少し形を変えて、6年目へと「水の学校」が続いていきます。より裾野を広げること、かつ市民の自主活動の度合いを高めることが変化のポイントです。我々雨水市民の会も、下水道課のみなさんと連携してまた新たな役割を探りながら、水を考え、楽しむ仲間の一人としてこれからも「水の学校」の発展に関わっていければと思っています。

おわりに

2014年度に開始した「水の学校」事業は5年が経過し、水循環を中心とした水環境への市民の理解・関心が深まり、組織的ではありませんが自発的な研究活動や、市民から市民への口コミの広がりが始まっています。これからは市民の水循環・水環境への関心をさらに深め、研究を奨励し、さらに地域全体へ水循環の推進・水環境保全活動を広げることが望まれます。

目的を振りかえる

「水の学校」を下水道課が開校する目的として「2014年度に下水道使用料の見直しを行うことに合わせ、下水道施設の重要性や更新等に莫大な費用がかかることについて、市民に理解していただく場をつくる」ということがありました。現代社会の水の循環の中で、人が手にして離れた水を、再生し自然の生態系の中に戻していくのに、どれだけの手間と費用がかけられているかを知っていただきたいからです。水循環全体を学ぶ中で、当市を含めた下水道事業について一定の理解をいただいたと感じています。しかし、奥が深い下水道事業にもう少し興味を持っていただくため、下水道に特化した講座を多く開けなかったことが反省点です。環境課題として水循環・水環境の保全という面では多くの方に興味を持っていただいていると思いますので、その点では次のステップに繋げていけると感じています。

講座構成について

連続講座で水循環全体を学んでもらい、それに付随してステップアップ講座、オープン講座がありました。座学だけでなく、五感でも感じてもらうことにより、一層理解が深まるようになる構成としていました。すべての講座でワークショップを行うことにより、一方通行ではなく、自ら考え、参加者同士の意見を交換し、発表することにより、気付きがあり、学びが深まっていったと考えています。運営する側としても「水の学校」を通して講座を組み立て運営するノウハウを一定程度修得できました。

受講生について

受講生について、年齢・職業・経験など多種多様な方々が集まり、とても積極的に学んでいただき意見交換していただいたことはよい点でした。しかし、受講生の興味も人それぞれで、市が伝えたいものと全てが一致するわけではありません。今後は、市が伝えたいものはしっかり伝え、受講生が学びたいものは、学び続けられるように少し後押しするといった、互いに信頼関係を築きながら講座を組み立てていくことが必要と考えます。また、低年齢時から下水道の役割や水循環・水環境への関心を深めることは重要であり、

低年齢対象の講座も必要と考えます。そのため、子ども向けの出前講座を行っていくこともこれからのポイントになると考えます。

水の学校サポーターの活動について

水の学校の修了生は、水の学校サポーターとなり市と連携しながら、自主的な活動をしている方々がいる一方で、サポーター登録を行ってなくても地域で活動している方々が一定数います。サポーターは組織団体ではなく、専門知識を持った個人が連絡を取り合いながら活動しており、他の環境団体にかけもちで所属している方もいます。当初、市民団体が誕生して活動していくことを目的としていましたが、組織団体の誕生にはまだ到達していません。しかし、様々な形で水に関する関心、意識をもった方々が市内で啓発活動を行っていることで、効果はあったと考えます。

今後について

「水の学校」事業において、水循環・水環境について参加者が自ら考え、理解していただくことができたことは大きな成果でした。多くの修了生が、その後も活動を続けるサポーターとして登録されていることが、ひとつの結果の表れであると感じています。

また、外部からの評価として、2015年度に国土交通大臣賞「循環のみち下水道賞」を受賞しました。下水道はアンダーグラウンドにあり、日頃目につかない存在であります。生活に欠かせない存在です。そこに「水の学校」が環境啓発としてスポットをあてたことが、「下水道の役割、重要性、魅力、可能性などに気づき、共感し、行動してもらうための効果的な広報活動や環境教育の取り組み」として評価され、受賞につながったものと考えています。

この事業の目指すところは、サポーターが「水の学校」の経験を生かし、自ら水循環、水環境、更に武蔵野市の下水道事業の重要性を学び、より多くの市民に理解を深めてもらうために伝え、行動することにあります。そのため、今後もサポーターミーティングを継続し、自発的な学びや行動を継続できる仕組みを確立できればと考えています。

ところで、水環境の問題は他の環境問題と密接な関係があります。環境課題を全体的に解決するためには、多様な環境啓発が連携し、知識や人材の交流を深めることが重要です。2020年11月クリーンセンター内に環境啓発施設エコプラザ(仮称)が開設されることで、水の学校サポーターの活動の場も広がるものと考えています。

以上のことから、今後この5年間の成果をさらにステップアップし、水の循環を切り口に広く市民に武蔵野市の下水道事業について理解していただくことで、下水道の目的である生活環境の改善や公衆衛生の向上、河川等の公共用水域の水質保全や浸水被害の防除のために必要な、市民一人ひとりの適正な排水や雨水の貯留浸透などの行動が広がることを追及していきます。

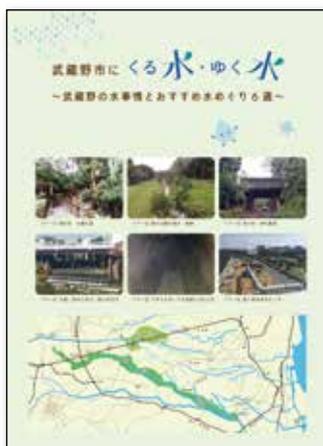
報告書の発行にあたって

『「水の学校」5年間のあゆみ』の発行にあたり、当事業にご協力いただいた様々な方々へ心から感謝申し上げます。「水の学校」の事業は、あらかじめ5ヶ年の事業として予算計上されていた計画ですが、5年目を迎え、市内外での評価をいただき、事業立ち上げの経緯や運営方法などについて問い合わせを受けることもありました。「水の学校」に携わった職員の間では、一生懸命事業を進めてきた成果・振り返りとして、「報告書を作成したい」という気持ちが湧き、限られた時間の中、構成等を考え議論し、打合せを重ねて今回のような形になりました。この報告書を参考に、また新たな環境啓発活動を市民と共に作り上げる際の材料となれば幸いと存じます。これからも市民のみなさんと連携し、くらしの中の身近な水循環、下水道の役割や、水循環・水環境の課題について、楽しみながら考えを深め、行動していきたいと思えます。

水の学校の発行物

「水の学校」では、受講生の声や講座を通して得られた知識、疑問などをもとに「水の学校」の活動をより広く伝える発行物を制作してきました。武蔵野市下水道課ホームページから、それぞれPDF版をダウンロードいただけます。

http://www.city.musashino.lg.jp/kurashi_guide/sumai_doro_suido/gesuido/1005732.html



武蔵野市に
くる水・ゆく水
A4版冊子



武蔵野市
水のほそみち紀行
A2版まちあるきガイドマップ



Oh!水
むさしのの水のものがたり
A3版パンフレット



水の学校 5年間のあゆみ

～武蔵野市水環境講座報告書～

発行年月 2019(平成31)年3月
発行 武蔵野市環境部下水道課
編集協力 NPO法人雨水市民の会
デザイン snug.

